

# 周作人におけるユートピアの精神

The Mind of Utopia in Zhou-Zuoren

顧 偉 良

Gu-Wei liang

## はじめに

周作人(1885-1967)は、中国の新文学運動を語る上で無視できない人物のひとりである。彼は小説家である兄の魯迅と肩を並べ、新文化運動に大きな功績を残した。一九一七年から一九三七年にかけて、周作人は北京大学教授として教壇に立つ傍ら、夥しい翻訳や文論および小品文(散文)を書き残した。小品文の提唱者として周作人の名は、中国新文学運動と共に刻まれている。

周作人の終生は翻訳生涯で終り、その文芸思想は啓蒙的、且つ奇異的であった。彼は生涯において自分の文学姿勢を貫いたが、その生涯は悲劇的なものであった。二回ほど憂き目に遭ったが、一回目は日中戦争後、「対日協力」という罪で問われ、暫く牢獄生活を過ごした。二回目は「文革」の頃に紅衛兵に乱暴され、小屋に監禁されたまま、この世を去っていったのである。

中国国内で周作人に対する従来一部の評価は、中国伝統文化に対峙するという意味で周作人の姿勢を批判しているものが多く見られる。ところが、周作人は単なる固執という意味での偏屈者でもなく、彼は実は儒教的道德観念に対して猛烈な批判を加えた。著書『中国新文学の源流』(1932)が最も雄弁にそれを物語っている。その点で言えば、周作人は寧ろ中国新文学を發展させる革新者でもあった。

周作人は、亡くなるまで北京の新街口八道湾住居に住んでいた。一九四七年初夏から一九六六年七月まで(「文革」の発生で紅衛兵による監禁)、十九年間に亘り古代ギリシア文学および日本古典文学の翻訳に没頭していた。翻訳された文学作品の字数は凡そ四百万字ものに達する。そのうち、

日本文学の翻訳作品は、『狂言選』、『浮世風呂』、『浮世床』、『古事記』、『枕草子』、『平家物語』であった。これらの翻訳業は、すべて周作人が六十二歳から八〇歳まで行ったものである。誠に敬服するに値するものばかりである。

周作人が書いた「遺言」の中で淡々とう語っている。「余は一生において文字というものを道と称するに足らぬと思う。ただ晩年に訳した古代ギリシアの対話集は、五十年來の唯一の願ひであった。識者は自ずとそれを知る。」(「余一生文字、无足称道。惟暮年所译希腊对话、是五十年來的心愿、识者当自知之。」[1965年4月26日])、と。これらの言葉の行間には、「知る人ぞ知る」という自恃の心情が込められている。

さて、本研究報告は、二〇〇八年四月以降、資料準備に着手しながら、夏予定の周作人家族や周海嬰氏(魯迅の息子)訪問などで追われていた。その間、執筆した拙文「浅析周作人的思想与文学方法(一)」(「周作人の思想と文学の方法をめぐって(その一)」(『紹興魯迅研究2009』、紹興魯迅紀念館編、2009年9月)が掲載された。

一昨年夏の調査研究を終え、弘前学院大学においてシンポジウム「魯迅、周作人と一九二〇年代の日本」(日本学術振興会)が行われ、顧偉良(研究代表者)の報告「周作人の散文世界におけるユートピアの精神をめぐって」(コメンテーター：李梁[弘前大学准教授])、小川利康(早稲田大学教授)の報告「周作人と松枝茂夫 雑誌『近世庶民文化』掲載の逸文をめぐって」(コメンテーター：長堀祐造[慶応義塾大学教授])が行われた。

研究代表者の報告は、第Ⅰ部、第Ⅱ部に分かれる。第Ⅰ部では、二〇〇八年九月到北京等地で行った訪問調査をふまえ、周海嬰氏、周作人家族のイ

インタビュー、また北京魯迅博物館、紹興魯迅記念館、上海魯迅記念館での訪問調査について報告した。報告後、北京での訪問スライドを見せた。第Ⅱ部では、武者小路実篤「新しき村」の思想受容をめぐる周作人の一九二〇年代以降の精神遍歴について考察した。

一方、小川利康氏の報告では、周作人・松枝茂夫の往復書簡を整理する過程で発見した幾つかの興味深い事実を踏まえ、『近世庶民文化』に掲載された松枝茂夫と周作人の戯文を取りあげ、古川柳の中でバレ句（性にまつわる題材を取り上げたもの）を専ら扱う雑誌になぜ二人は興味を持つか、その背景にはどんな思想が見出せるかについて検証した。

## I、研究調査報告

二〇〇八年九月一日から十八日までの日程で北京魯迅博物館、紹興魯迅記念館、上海魯迅記念館の研究調査を行い、そして周海嬰氏、周作人家族などの人士を訪問した。

北京で周海嬰氏を訪問する前に、魯迅博物館元副館長陳漱渝氏を訪ねた。陳氏からは、八〇年代以降の周作人研究をめぐる語ってくれた。七十年代後半、周豊一氏（周作人の長男）より、当時の共産党総書記胡躍邦氏に周作人名誉回復に関する趣旨の書簡を送った。胡躍邦氏は、「読書甚だ少なく、専門家に研究すべし」として、関係部門に指示を出したとのこと。その後、北京魯迅博物館の企画で、一九八〇年代初期に二回にわたるシンポジウムが行われた。

一回目は、北京で魯迅と周作人の比較研究をめぐるシンポジウムが行われ、二回目は、敵偽時期（すなわち日本軍の北京占領期）における周作人の思想と文学についての討論会が行われた。これをきっかけに、中国国内の周作人研究は徐々に軌道に乗り、次々と研究成果が現れた。例えば、『周作人年譜』（張菊香・張鉄榮編、南開大学出版社、1985）、『周作人研究資料（上下）』（張菊香・張鉄榮編、天津人民出版社、1986年）、錢理群『周作人伝』（北京十月文芸出版社、1990年）、『周作人研究二十一講』（中華書局、2004年）など研究著書が多数現れた。研究動向としては、五四時期におけ

る周作人の文学活動に対して大まかに肯定的な見方を示している。日本軍北京占領期における周作人の思想と文学に関して諸説があり、特に周作人の行動に対して否定的な見方が多い。中でも注目すべき研究も現れた。

北京魯迅博物館には魯迅故居があるが、四合院の形で建てられた魯迅故居の各部屋には日本式の襖が作られて、当時張られた和紙もそのまま残っている。簡素で小さな四合院だったが、採光や住居の機能性が十分に考案されたようである。

周海嬰氏のインタビューは、周氏自宅で行った。ちょうど許広平氏生誕百十周年展が上海や紹興で開かれ、インタビューの際、周海嬰氏は、許広平の病死をめぐる文革中の出来事について詳しく話し、また上海時代の思い出も語ってくれた。そして、魯迅の孫周令飛氏からも、企画中の上海魯迅文化センター（[www.luxun.cc](http://www.luxun.cc)）について紹介してくれた。

昨年、『魯迅譯文全集』（全10巻、魯迅博物館編、福建教育出版社、2008）が刊行された。五十年代以来のことである。今回の出版にあたって何か新しい資料が発見されたかと周海嬰氏に尋ねたが、「編集に関わっていなかったので、具体的には分かりませんが、ただ私の知っている限り、魯迅がゴーゴリの『死せる魂』翻訳の際に大変苦労したようでした。一字一句の訳語にこだわって数年もかかっていたのでした。」と、周海嬰氏は語ってくれた。因みに、魯迅はドイツ語版『死せる魂』を訳した。

『魯迅譯文全集』には、鶴見佑輔の散文集『思想・山水・人物』に関する一部の訳文が収録されている。『思想・山水・人物』は、大正十三年に大日本雄弁会出版より刊行。それは、鶴見佑輔が大正十年に欧米諸国、および北京、中国東北地方などを歴遊し、政治や自由などの話題にのぼるエッセイをまとめた本である。魯迅が鶴見佑輔の散文集を翻訳したのは、やはり世界事象に多大の関心を寄せていたと思われる。数年前に日本語訳版の周海嬰回想録『わが父魯迅』（集英社、2003）が出たが、今後も続けて何か執筆なさる計画があるかと、周海嬰氏に尋ねたが、今のところはないと答えた。

魯迅はなかなかの映画ファンであった。子供教

育に対しては放任主義で、幼い海嬰に対して特に厳しい教育を行わず、殆ど趣味中心で遊ばせたという。周海嬰氏はアマチュアの撮影家であり、写真撮影は一九四〇年代から始まり、現在に至っている。昨年刊行された『鏡の中の人間——周海嬰撮影集』（香港天地出版、2008）には、四〇年代に撮影した貴重な写真がいっぱい収録されている。

この日、陳漱渝氏の訪問で、作家蕭乾夫人文潔若との面会を紹介してくれた。文潔若女史は、著名な外国文学翻訳家で、私が日本語勉強の時代から尊敬した大先輩であった。夫の蕭乾と共に四十年間かかって、『ユリシーズ』の中国語訳をした著名人である。作家蕭乾は、『蕭乾文集』（全10巻）、『蕭乾譯作全集』（全10巻）、日本語訳には蕭乾著『地図を持たない旅人』（上下巻、丸山昇ほか訳、花伝社、1992）など著作多数ある。文潔若女史は、長らく人民文学出版社で外国文学翻訳編集長を務め、五十年代の頃、日本古典文学（古事記、平家物語、枕草子など）および近世文学の翻訳をめぐってほぼ毎週くらい周作人と会っていた。「苦雨齋主人の晩年」（『文潔若散文』、華夏出版社、1999）の中に、周作人の思い出および文革中に周作人の遭遇した憂き目について触れられている。

周作人の日本文学翻訳に匹敵するもう一人の人物がいた。その名は、錢稻孫氏（元北京大学教授）であり、周作人と同郷、二人は生涯の友として付き合っていた。錢氏の日本文学翻訳は、『万葉集選』（1959、日本学術振興会より出版、のち1992年中国友誼出版社刊行の『日本文学名著選訳叢書』に収録）、『近松門左衛門・井原西鶴選集』（人民文学出版社、1987）、『伊勢物語』、『日本謡曲選』のほか、木下順二の戯曲などの翻訳もある。

文潔若女史は編集者時代によく錢稻孫氏に接し、日本文学についていろいろと教わったという。今回は周作人のことについて伺う機会に恵まれ、周作人の日本文学翻訳書等を含む十数冊の本を頂いた。なお、文潔若氏女史の日中文化交流の功績を讃えるため、日本政府から外務大臣賞など送られた。

周作人家族とのインタビューは、張莢芳女史（周豊一氏の妻）の自宅で行った。応接間には魯迅と周作人の肖像画が並んで掛かっているが、とても印象的であった。訪問者は、一九二八年に周

作人の翻訳した森鷗外の自伝作品『キタ・セクスアリス』（中国語訳「性的生活」[断片]、）について、まず話題として切り出し、興味を持たせた。90歳に近い高齢の張莢芳女史は、興味津々で聞いてくれた。インタビューの話題は、周作人の日記集、書簡集の整理出版などをめぐって多岐に分かれ、私自身の研究経緯についても聞かれた。張莢芳女史は、文革中に悲惨な死を遂げた周作人のことについて触れ、語ろうとしたが、涙ぐんで口を噤んでしまい、思う存分にお話しできなかった。

インタビューを終える前に、張莢芳女史から、中国の平民教育に最も力を入れた晏陽初氏について触れ、周作人も晏陽初の平民教育に関心があったと披露してくれた。筆者は日本に戻ったあと、早速、晏陽初氏の従兄の孫、晏鴻国氏（四川省巴中晏陽初博士史跡展覽館館長）にメール連絡をした。

昨年10月14日付の晏鴻国氏からのメール通信が届く。それによると、「晏陽初先生が定県実験を実施する時、多くの知識人を集めたが、例えば孫伏園、熊佛西、黎錦暉等多くの文学芸術界の文士が参加してくれた。私が持っている資料には、晏陽初から出した、許地山を河北省県政改革研究院指導員として招聘する文書もあった。ただしその他の資料には、許地山が平民教育会に実際に関わったという記載が残っていない。当時の平民教育会の行った実験には国内外の多くの学者の注目を集めた。周作人先生は、1934年定県を訪れたことがあり、彼の「保定定県の訪問記」が『國聞週報』（第12巻第一期、1935年1月1日、天津）に掲載、後に曹聚仁の編集した『現代中国報告文学選乙編』（1965年5月、366-370ページ）に収録。ただ周作人が平民教育会の活動に参加したかどうかについては、いまのところそれを証明する資料が発見されていない。」という。

『周作人文類編・八十心情』（第十巻、湖南文艺出版社、1998）に「保定定県之遊」（「保定定県訪問記」）が収録されている。周作人は、一九一〇年代後半から武者小路実篤の「新しき村」に共感を示し、自宅にも「新しき村」北京支部を設立した。周作人の書いた「新村北京支部啓事」（1920. 3. 1）によると、「新しき村」北京支部の設立は一九二〇年二月のこと、場所は「北京西直門内八

道湾十一号周作人宅」であった（『周作人散文全集』第二巻）。従って、周作人が平民教育会の活動に興味を示したのも決して偶然ではないと思う。

今回、張炎芳女史から署名入りの『知堂回想録』（上下巻、安徽教育出版社、2008）を頂いた。初版本の『知堂回想録』（香港天地圖書出版社、1970）には一千箇所余りの誤字や誤植があった。ちなみに、待望の『周作人散文全集』（全14巻、別巻、広西師範大学出版社、2009）が刊行された。

周作人家族訪問の翌日、新街口八道湾胡同にある魯迅故居を訪れた。今は多くの人家が住む雑居に変わったが、昔の面影がまだ残っている。文革中に憂き目に遭った周作人の様子を目撃した住民からも話を伺った。

北京訪問を終えたあと、杭州の途につく。二十六年ぶりに紹興魯迅記念館を訪ねる。もと館長は、当日の急用で面会できなかったが、『紹興魯迅研究』の責任編集者が会ってくれた。この編集者からは新築の紹興魯迅記念館、魯迅の旧家について詳しく紹介し、また刊行された雑誌『紹興魯迅研究』（紹興魯迅記念館編）もくれた。この雑誌は2005年まで館内刊行物だったが、現在は公開刊行物となっている。二時間ほど魯迅記念館を見学、新しく設けられた周作人展示室がとても印象的であった。ちょうど許広平平生誕110周年展が開かれ、そこを見学した。

紹興魯迅記念館のすぐ傍には蔡元培（北京大学初代学長）の故居があった。そこも見学した。展示室には写真資料が充実で、かつて北京大学に教鞭を取った魯迅や周作人らの写真も展示されている。展示室の一角に書かれたデューイ（John Dewey）の言葉が印象的であった。「世界各国の大学学長を比較すれば、オックスフォード、ケンブリッジ、パリ大学、ベルリン大学、ハーバード、コロンビア大学などの学長、または幾つかの学科では卓越な貢献をなさった者が多く輩出した。だが、学長の身分として、北京大学をはじめ、ひとつの民族、乃至一つの時代に対して機知に富んだ役割を果たした者は、蔡元培氏の他に恐らく見出せないだろう。」と。学問精神を重んじた蔡元培は、党派を問わず多くの人材を登用した。周作人もそのひとりであった。二十年代、ないし三十年代の中国知識人の群像のなかで、やはり周作人は

重要な一員であることを、世に忘れることができないと思う。

ここで、文潔若女史が書いた「苦雨齋主人の晩年」の一節を見てみよう。

周作人のような紆余曲折の人生を歩んだ人物は、なおも「五四」以来の中国新文学史において無視できない重要な文化人である。決して彼が言うように、「影もなく形もなく無くなる」という風にはならないのであろう。「五四」文学の研究においては、周作人は依然として焦点人物となっている。彼は創作の他に翻訳も行った。魯迅とは兄弟関係であるのみならず、魯迅と肩を並べて共に活躍していた。（中略）周作人は過失があったが、中国文化史および文学史において悲劇的な人物であるのは間違いない。西洋では第二次世界大戦中に過失を犯した文人に対して、すべて客観的な評価が下されていた。将来、史家たちの周作人に対する評価も全面的客観的なものになるだろうと信じている。

（『文潔若散文』、華夏出版社、1999）

歴史上、ある人物をめぐる評価は、常に時代に翻弄されることがあるが、周作人に関して例外ではない。中国では未だに『周作人全集』が出ていないのは、ある意味では文化に対する理解や認識に限界があることを知らざる、いわゆる権力者側の「文化政策」によるものであろう。しかし、周作人のような文化人ないし教養人に対し、もはや決定的、最終的な結論などありはしない。なぜなら、真の文化の作り手は決して権力者ではなく、教養や識見を持った一人一人の文化人に委ねられているからである。死の直前までに周作人の行っていた古代ギリシア文学や日本古典文学の翻訳は、それを物語っている。周作人のような文化人に対する理解は、何よりも寛容の思想が不可欠であろう。

## II、研究展望

中国における魯迅研究および周作人研究は異なるものであった。魯迅研究は、内外を問わず長い歳月を経ているのに対し、周作人研究は、その

「歴史的・政治的」の要因でかなり遅れていた。一九八〇年代以降、周作人文集の刊行が行われ、周作人に関する伝記や研究著書も相次いで出されてきた。中には頗る毀誉褒貶の感を抱かせるものもあるが、周作人研究が漸く軌道に乗るようになった。

周作人研究について、やはり北京大学元教授銭理群氏を抜きにしては考えられない。魯迅研究家として知られる銭氏により、その豊富な資料に基づく研究書『周作人伝』（北京十月文芸出版社、1990年）、『周作人論』（上海人民出版社、1992年）、講演録『話説周氏兄弟——北大演講録』（山東画報出版社、1999年）、『読周作人』（天津古籍出版社、2001年）、そして『周作人研究二十一講』（中華書局、2004年）が刊行された。最近の研究動向としては、『半是儒家半秋家』（哈迎飛著、人民文学出版社、2007年）があり、やや難儀する箇所もあるが、主として周作人の思想面をめぐって論じられている。

銭理群氏の『周作人論』、『周作人伝』および『周作人研究二十一講』は、やはり中国国内に於ける周作人研究の集大成であるといえよう。ただ銭氏の場合、周作人と日本文学との関係領域に関してはなかなか手が届かない歯痒い面がある。

日本に於ける周作人研究は、近年、木山英雄氏の大著『周作人「対日協力」の顛末——補注『北京苦住庵記』ならびに後日編』（岩波書店、2004年、中国訳『北京苦住庵記——日中戦争時代の周作人』趙京華訳、三联书店、2008年）がある。その他に、『文学復古与文学革命——木山英雄中国現代文学思想論集』（趙京華編訳、北京大学出版社、2004年）も刊行された。前者においては、日中戦争期をめぐる周作人の敏感な歴史的問題に関する木山氏の注目すべき研究成果が公表され、後者においては、中国文学研究に関する数々の論文が収録されている。

周作人と「新しき村」の研究に関しては、尾崎文昭氏等による優れた研究がある。その他に海外の研究者、シンガポールの徐舒虹『五四時期周作人的文学理論』（学林出版社、1999年）、David E. Pollard, "A Chinese Look at Literature: The Literature Values of Chou Tso-jen in Relation to the Tradition"（[英] ト立德『一個中国人的文学

観——周作人的文芸思想』、陳広宏訳、復旦大学出版社、2001年）などがある。

近代中国の新文化運動は、新生中国に輝かしい扉を開いた。文学、思想などの面で多くの文化人が現れ、周作人は啓蒙思想家、文芸評論家として、人文科学思想の知恵を集め、自国中心主義の風潮に批判的な眼差しを向け、異国文化の理解に役立つ多くの著述を残してくれた。

中国における日本研究は、歴史上あまり重要視されなかったが、近代になって黄遵憲の『日本雜事詩』（1879）、『日本国志』（1887）、戴季陶の『日本論』（1928）の如く、数冊の日本に関する研究著書しか現れてこなかった。二十世紀初頭に周作人によって日本研究の必要性が提起され、我々に新しい道を切り開いてくれた。

ここで、中国新文学と明治新文学との接点について考えてみたい。中国新文学運動は、不思議にもロシア文学上の「シルバー時代」のフォルマリズムに目を向けず、日本の明治新文学に目を向けるようになった。この問題については、中国国内の批評家も注目を払っている。例えば、林精華氏は、彼の論文「なぜ“五四”運動期にロシアシルバー時代の人文自由主義の文化遺産を受け入れなかったか」のなかで、中国新文学運動は、ロシア・フォルマリズムの詩運動に目を向けなかったことに言及し、その主な原因は、「五四」運動期における新文学運動の政治的・思想的の文学批評に功利性があったと挙げている（原題「五四何以拒絕俄國白銀時代自由人文主義文化遺産」、創刊号『文学前沿』、首都師範大学出版社、一九九九年）。

この問題は、きわめて複雑で歴史的諸要素も絡んでいる。近代中国の口語散文の発展は、前近代的要素もあるが、基本的には一九一〇年代の新詩運動からスタートし、その中で日本の口語自由詩が紹介され、明治新文学と出会ったわけである。中国新文学にとって明治新文学は、新しい文学モデルだったのである。

中国新文学にもっとも影響を与えたのは、白樺派であった。魯迅により武者小路実篤の『ある青年の夢』が訳され、雑誌『新青年』に四回連載され、その後、周作人の書いた文「武者小路実篤の『ある青年の夢』を読む」が、『新青年』（4巻5号、1918. 5. 15）に掲載される。作品の内容は勿論の

こと、その清新な口語文体が魯迅にも刺激を与えた。後に武者小路実篤から周作人宛の書簡「支那未知の友とともに」が送られる。周作人により訳され、『新青年』（7巻3号、1920.2）に掲載。「新しき村」の理想に共感を寄せた周作人は、その理想と実践を熱心に中国に紹介する。新文学運動の展開する中で、彼は新文学の要求から明治新文学の発見、そして小詩の実験から俳句や短歌の翻訳を通じて、石川啄木、小林一茶、戸川秋骨らと出会った。すなわち、ジャンルからジャンルへと越境し、日本の俳諧文学を発見するに至るわけである。周作人は時には闘ったり、時には遊んだりして、文学ジャンルの中で埋もれていた芸術の価値を発掘し、文学の想像力を豊かにしてくれた。このように明治新文学との出会いにより、中国新文学にとって新たな生命力を与えられた画期的な意義があった。

一九一〇年代は、日本では言文一致——口語体文化運動の確立期（一九〇〇～一九〇九）に当たり、そして、明治四三年（1910）から大正十一年（1922）にかけては、口語体文化運動の成長・完成期であった。明治四十年代は、日本近代文学史において文学開花の時代であり、文芸誌『白樺』（明治四三年四月～大正十二年八月）が誕生した。この時代は自然主義文学の停滞のあとを受け、耽美派（「パンの会」）等と共に反自然主義の文学潮流が現れた。白樺派は理想主義文学を掲げ、輝かしく文壇に登場し、武者小路実篤の清新な口語文体、その自由な表現は、大正文学の幕開けにふさわしいものであった。

周氏兄弟（魯迅、周作人）の白樺派文学受容は、そのような時代背景にあったのである。従って、中国新文学の発展を考える上で明治新文学は至近距離にあった。成熟したロシア・フォルマリズムと擦れ違った歴史的原因について考えると、その最大の要因は、もちろん中国の「近代」の出遅れによるものと挙げられるが、近代中国の口語散文の発展プロセスにおいてその要因を追究すれば、もっと具体的な要因が明るみに出てくるのだろう。

### Ⅲ、周作人におけるユートピアの精神

#### 1. 問題提起

さて、今回のテーマは、周作人におけるユートピアの精神について考える場合、まず中国文学におけるユートピアの問題が思い出されるだろう。例えば、古の「桃源郷」（陶淵明の「桃源郷記」）は、何となく俗世から離れ、士大夫階級が追い求めようとした、一般の人々の近寄れない精神的な理想郷といったイメージが強いかも知れない。だが、詩文世界におけるユートピア性は必ずしも単純なものではない。詩における物性を考えると、詩文世界において、山水や事物に託した複雑極まる繊細な文士の心境が込められている。または変幻自在の時の流れ、ないし無常なる事物が見え隠れしている。詩文は、文士たちにとって正に無我の境地を求める極致の世界でもあった。

近代社会になってくると、さすが桃源郷のような理想像も、社会変動に伴って現実性を交えながら確実に生まれ変わった。清末における「大同世界」の夢、五四運動期において理想像として看做された「民主社会」や「科学の未来性」といったユートピア性が見られる。その後、延安時代における共産主義理想の青写真、毛沢東の「延安文芸講話」における大衆文芸のユートピア性が濃厚に打ち出されていた。そして、五〇年代に行われた土地改革に続く「人民公社」の建設、「大躍進」に始まった急進的な工業運動が行われ、それと同時に繰り返された反右派キャンペーン、文革大革命が裏付けるように一種の集団的ヒステリー気味の時代が暗躍していた。「文革」はまさに中国社会のユートピア性の頂点に達したのであった。

#### 2. 周作人におけるユートピアの精神

周作人は、中国新文学運動の推進者の一人であった。一九一〇年代半ばから一九二〇年代にかけて、彼は文学思想面で時代の先駆けを走った啓蒙者の一人であった。この期の文学を語る場合、彼を抜きにしては考えられないのである。

二十世紀初頭、新旧文学の交替のなかで周作人は人間主義の文学を主張し、新鋭の文芸評論家として頭角を現わした。とくに清末の旧小説「鴛鴦

胡蝶派」との闘い合いの中で熾烈な論争が展開した。この期の周作人の精神遍歴は、白樺派の武者小路実篤の「新しき村」との密接な関係にあった。その後、ハヴァロック・エリスなどの思想に接近するにつれて、周作人の文芸思想の変化が著しかった。周作人におけるユートピアの精神を考える場合、やはり彼を取り巻く思想圏に着目する必要がある。

ここで、周作人の『芸術と生活・白序』(1926年8月)の中で自ら語った言葉を見てみよう。

この文集に収録されているのは、これまで芸術と生活に関する私の意見の一部分であり、その後どうなっているかについては、私自身でさえ知らないが、少しは違うだろう。(中略)一九二四年以降書いたものは三篇あり、以前の論文とはやや違うが、自分の言葉で言うと、夢想家や伝道者の意気込みは段々と弱くなっていったと思う。ひとりの人間は、ある時期において理想派になろうと、文芸や人生に対してある種の主義を抱いているのかも知れない。以前の私は、ユートピアを夢見たこともあり、新しき村にも大変憧れ、文芸上に於いて多くの主義主張を行っていた。今でも日本の新しき村の友人たちを尊敬しているが、このような生活は自分の趣味を満足させる以外に、世に対し大して大きな効力を持つものとは思えない。人道主義の文学も同然である。自分の趣味を満足させるならば、それは十分であり、またこのような芸術と生活とを行う充分な理由でもある。以前の私が愛好した芸術と生活のある相は、今も大抵好んでおり、ただ目的がやや変わった。以前は見え隠れのような主義が好きだったが、今は芸術と生活そのものを愛している。

この論述は、周作人の文芸思想に関する有名なマニフェストであった。武者小路実篤の「新しき村」の理想主義は、一種のユートピアであるが、彼らの実践は、この世界の代わりに別の世界、つまり自分たちの願望に沿った別の性質を備えた世界の建設を目指そうとしたのである。彼らはその方法で幸福を手に入れようとしたわけであった。

「新しき村」に対する周作人の関心は、並々な

らぬものであった。彼は精力的に「日本の『新しき村』」、「日本の『新しき村』訪問記」、「『新しき村』の精神」(1919年)、「『新しき村』の理想与实践」、「『新しき村』の討論」(1920年)を執筆し、「新しき村」の精神を中国に紹介した。当時、北京大学図書館職員、若き毛沢東も好奇心で八道湾の周作人宅を訪ねたことがあった。

ところで、上記の文には「新しき村」の理想郷に対する周作人の思想上の変化が見られるが、「新しき村」の理想像を理解するには、フロイトの言葉は極めて示唆的である。

われわれは、みなそれぞれどこかしら妄想症患者に似た行動を取るものであって、現実世界のうちの自分にとっては耐えがたい部分を願望形式によって訂正し、現実世界の中へその妄想をもちこむのだということがいわれる。とくに重要視しなければならないのは、かなりの数の人間が共同して、妄想による現実世界の改造という方法で自分の幸福を確保し、苦痛を免れるための試みを実行する場合である。人類の宗教も、こうした集団妄想の一種とみなすべきものである。もとより、自分もまだこの妄想に捉われている人間は、それが妄想であることには気づいて気がつかない。

(「文化への不満」、『フロイト作品集』第三巻、p.445、人文書院)

フロイトの論述を踏まえ考えると、周作人の「このような生活は自分の趣味を満足させる以外に、世に対し大して大きな効力を持つものとは思えない。」という考えは、自分の理想像に対して修正軌道に入ったと見られる。

周作人、『周作人論』(上海北新書局、民国23年)の「周作人自述」の中で、ハヴァロック・エリスに言及し、「自分の読書のうち最も影響を受けたのはイギリスのエリスの著作であった」と述べ、そして、「フロイト派の児童心理を知らなければ、彼(注：周作人)の思想態度に関する批評は、どんな説も無駄、すべて徒労に終わる。」とも指摘した。以下は、「周作人自述」の全文である。

周作人、原籍浙江会稽、生于光绪甲申、其

实却は一八八五年了。十二岁丧父，读了四书五经后十七岁考入江南水师学堂，隶管轮班，在校六年，考取出洋留学，因近视命改习土木工学。一九〇六年至日本，初入法政大学预科，后改进立教大学，辛亥革命归国学无专门只学了儿句希腊文与日本文而已。民国元年任本省教育司省视学半年，其后在乡任省立第五中学教员四年，六年至北京任北大附属国史编纂处编纂员半年，七月任北京大学文科教授，至于今日。其间张作霖为大元帅时代离校一年。一九〇九年娶于东京，有子一女二。末女于民国十八年冬卒，年十五。

关于外面的生活所可说的就是这几句。如再要说明几句，则可以说，他原是水师出身，自己知道并非文人，更不是学者，他的工作只是打杂，砍柴打水扫地一类的工作。如关于歌谣、童谣、神话、民俗的蒐寻、东欧日本希腊文艺的移译，都高兴来帮一手，但这在真是缺少人工的时候才行，如各门已有了专攻的人他就只得溜了出来，另去做扫地砍柴的勾当去了。因为无专门，所以不求学但喜欢读杂书，目的只是想多知道一点事情而已。所读书中于他最有影响的是英国蔼理思的著作。

以上是在民国十九年为燕大月刊所写。现在可以加添一句，如不懂弗洛伊特派的儿童心理，批评他的思想态度，无论怎么说，全是徒劳。

民国二三年末（下線引用者）

「周作人自述」から見るように、彼はハヴァロック・エリス、またはフロイトから少なからぬ影響を受けていたことが分かる。その他に、周作人は「教訓之無用」（1924）などで、エリスの『道德之芸術』をめぐる道德教訓の無用について触れている。『夢の世界』（ハヴァロック・エリス著、藤島昌平訳、岩波文庫）によれば、『道德之芸術』は、『愛と徳とに関する小論集』（Little Essays of Love and Virtue, 1922）ではないかと思われる。

ハヴァロック・エリスは、一八八九年から一九一四年まで、『現代科学叢書』（The Contemporary Science Series）を主宰した。彼の『新精神』（The New Spirit, 1890）、『犯罪者』（The Criminal, 1890）は、社会的問題に対して科学精神による解釈の試みを行った。そして、『十九世紀』（The

Nineteenth Century, 1900）、『夢の世界』（The World of Dreams, 1911）等は、ともに文学的佳作とも言うべきである（『夢の世界』参照）。一八九七年、ハヴァロック・エリスの『性心理学の研究』（*Studies in the Psychology of Sex*）第一巻が世に出た直後、発禁となった。その後、米国で刊行せざるを得なかった。フロイトの精神分析は実験中心であったが、ハヴァロック・エリスは、生物学の角度から性心理の研究に取り組んだ。

周作人は日本留学時からずっと晩年まで、ハヴァロック・エリスの思想に傾倒していた。エリスに関する論述は、その生涯において途絶えることがなかった。ハヴァロック・エリスとの出会いは、丸善であった。一九〇六年八月、周作人は兄の魯迅と共に来日後、度々丸善を訪れる。『性心理学の研究』の購入も丸善であった。回想「東京の書店」のなかで、周作人は「エリスの『性心理学の研究』（七冊）は、私にとって啓蒙の本であった。それを読んで日から鱗が落ちるほど人生や社会に対して新たな見識を得られたのである。」（1936. 10. 1）と語っている（『周作人散文全集』第七巻）。

一九一〇年代から二〇年代にかけて、周作人の思想上の変化は著しかった。次の文を見てみよう。

私の思想は、今年になって民族主義に戻ってきた。最初は錢玄同先生と同様、尊王攘夷の思想をもっていたが、義和団一揆の際、郷里で一人の西洋人のボール型の帽子が浮浪者に撃ち落とされたのを聞いたあと、心地よくそれを日記に記した。後に《新民丛報》《民報》《革命军》《新广东》を読んで、一変して排満（及び復古）主義になり、民族主義者として十年間ぐらい踏ん張ってきたが、民国元年になって漸くへっ込んだ。五四時代にはコスモス主義の夢を見て、融通の利かない多くの言葉を残したが、昨年辺りから範囲を縮小し、アジア主義と改めた。清王室が廃止され皇居が遷った後、遺老旧臣たちおよび日本やイギリスの海外浪人が騒動を引き起こそうとした彼らの陰謀悪だくみは、今日に至っても止まらない。そこで、自分の融通の利かないことを悟り、民国の土台がまだしっかりしていないと思い、今はやはり事実に基づいて



民族主義の原点に戻らなければならないと思う。宗教家による愛国主義が提唱されているようであるが、私は国家だからといって愛すべしとは信ぜず、個人の生存観点から民族主義を主張するならば当然であり、更に“高尚”な他の主義とも衝突しないだろうと思う。ただし、これは私個人の思想的傾向であり、青年の間で宣伝しようとはしない。民族革命思想の浸潤を受けず、革命や復活の時に恐怖の念を受けたことのない者ならば、我々のような心境に対してたいてい理解できず、或いはそのような態度は、時代遅れで非紳士的ではないものと思うのかも知れない。私が表明したいのは、自分の思想の反動に過ぎず、過激にせよ頑固にせよ、私が世界主義を主張する者であると仰がないように願うだけである。

（「元旦試筆」民国14年1月、《雨天的书》、下線引用者）

上記の文において、周作人は二十世紀初頭に錯綜した中国社会情勢の中で自分の歩んだ道を振り返ってみたが、彼の言う「民族主義」や「アジア主義」について、即ち彼自身の主義主張と直結して考えるのが早計であろう。上の文からみると、周作人の文芸志向は思想の「信仰」から自然を愛する懷疑の精神へと転換していくことにあったと思われる。その精神の裏にはハヴァロック・エリスの思想が基底となっているのを見逃してはならない。

では、周作人の世界観をどのように理解すればいいか。フロイトの『トーテムとタブー』の中に示された仮定した人間の世界観の三つの段階についての認識を見てみよう。

人間の世界観の発展過程、すなわちアニミズム的段階に宗教的段階につづき、さらにこれに科学的段階がつづくという過程を認めるとすれば、これらの各段階を通じて「観念の万能」の運命をたどることは、困難ではない。人間はアニミズム的段階では、自分みずからが全能性をもつものと考えた。宗教的段階ではこれを神々に譲った。しかし全能性を本気で断念してしまったわけではない。なぜなら、人間は自分の

願望に応じ、さまざまな影響をあたえて神々を左右する権利を留保しているからである。科学的段階となると、そこにはもはや人間の全能を考える予知はない。人間は自己の卑小さを認め、死やその他の自然的必然に一種の諦めをもって服しているからである。

（『フロイト作品集』第三巻、p 221、人文書院）

人間の世界観の発展過程をめぐるフロイトの見解は、周作人の思想的傾向を考えるうえで示唆が多い。特に二十年代以降の評論において周作人の科学的観察態度が顕著に表れている。では、周作人の示した「芸術と生活そのものを愛している」という考えは、どのように理解すればいいのか。

ここで、宗教と学問と芸術との関係について語ったフロイトの言葉に注目したい。

われわれが所有する偉大な詩人兼賢者の一人が宗教と芸術および学問の関係について述べた次の有名な言葉である。

「学問と芸術を所有する者は、

宗教をも持っている。

学問と芸術を所有しない者は、

宗教を持つよう心がけるよい」

ゲーテ『おとなしいクセーニエン』（遺稿詩）

（『フロイト作品集』第三巻、p.439）

フロイトは、ゲーテの言葉についてこう解釈した。つまり、「われわれに課せられている人生はわれわれにとってあまりにも重荷で、われわれにあまりにも多くの苦痛・幻滅・解きがたい課題を押しつけてくる。人生を耐え忍ぶには、鎮痛剤が不可欠である。（中略）学問的な活動も、この気晴らしの一種である。芸術が与えてくれる代用満足は、現実に対比した場合は幻想にすぎないけれども、心理的効果の点では、空想が人間の心理活動において占めてきた役割からいって、現実には劣らない。」と述べると同時に、「けれども、芸術によって得られる微弱な麻酔は、人生に含まれていくさぐさの苦難からの束の間の逃避を招来することができるだけで、現実の悲惨さを忘れさせるほど強力ではない。」（「文化への不満」）とも強調した。

文化的倒錯とユートピアとの関係が文明の時代には常に存在している。両者はともに「現実」を超えていこうとするが、いかに社会をかえ、いかに人間の自我をかえていくのか、恐らく文明時代に生きる人間は、ひたすら「現実」を超えようとする衝動に駆られて前へと進もうとする。しかし、文化は人間の欲求を充足する面がある一方、場合によってはそれを妨げる面もある。一つの方向で精神的エネルギーを消耗するには、他の面での選択肢の可能性を犠牲にしなければならない。従って、文化の究極は欲求の断念にある、というフロイト精神の限は、文明時代においてアイロニカルな意味合いを持っている。

このように見てくると、「芸術と生活そのものを愛している」という周作人の考えは、彼自身のなかで「理想主義」に対して修正軌道に入ったと思う。「新しき村」の理想からの脱皮も、正にそのような精神的構造によるものと考えられよう。なぜなら、文化は、常に精神上の不安に対する防御機構としての機能を常に持っているからである。ただし、思想上、文芸上の軌道修正は、必ずしも周作人の退嬰の考えを示すものではなく、むしろそれ以降の周作人の散文世界には、事物に対する機知に富んだ観察の方法、または思想的にも寛容の精神が内包されている。

周作人の精神構造は、「五四」運動以降の文学低迷のなかで文学芸術と卑俗な生活との密着に関心を持つようになる。彼は理想主義に代わって、古代ギリシア文学および日本古典文学（特に近世文学）に道を求めていく。特にハヴァロック・エリスやフロイトの思想に接近することによって、周作人の文芸思想に新たな世界観がもたらされたことが分かる。

思うに、人類の起居生活の様式は、すべて想像力から生まれるものであり、元々在ったわけではない。好むと好まざるとに拘わらず、音楽や建築、文学芸術などを必要とする人間社会の環境も、すべて究極のユートピアの精神から生まれてくるものである。その中に自然の摂理や事物の真理に対する探究精神が内包されているはずである。

#### IV、周作人の風刺精神

教養人などは大海の中の一滴のインクにすぎない。歴史において暴力の前には優雅な文化活動などまるで一本の花のように儂いものと、作家フォースターは見ている。人間の文化は、人間のあらゆる言動において文化を形成する要素として位置づけられている。その根底には社会像や人間像がある。それは、人生における、目に見えないどころか語り得ないものの価値——ヴィジョンとでも呼ぶしかないものの重要性を認識できる能力あるいは感受性の有無、ひいてはこの能力にもとづく一人の個性的な人間としての声の有無にかかっているのである。この能力は、権力や財力といった世俗の実力とは別種の、不可避的に孤独な人間に生きる勇気を与えてくれる「美」を認識できる感覚だとも言える。「美」の意識は、そのような人間文化の土台の上に築きあげられるものである。

不思議にもフォースターのような「美」の意識がどこか周作人にも潜んでいるように思える。小品文「トルストイのこと」を見てみよう。

达尔文的《人种由来》译成俄文的时候，检察官想禁止它的出版，因为达尔文所说与圣书的传上成人不同。托尔斯泰听见这个消息，便写了一封又诙谐又严正的信给检查局长朗吉诺夫（Mikhal Longinov），其文曰，“密哈耳兄，听说达尔文的学说使你非常惊愕懊恼，至于想禁止它的翻译传播，这件事是真的么？请你容我说一句话。密哈耳兄，你仔细想一想吧！足下的后面未必长着一条尾巴，那么对于在大洪水以前或者有过也未可知的事情为什么这样着急呢？……倘如听从理性的呼声，承认一切学问不能忍受如何的禁制，须在完全自由之下才能繁盛，足下有什么权利可以宣布禁止呢？创世之时你曾在场么？为什么人类一定不能逐渐的变成现在的形状呢？……好朋友呀，还有一句话要告诉你。我们俄国人并不是有支那的万里长城那样东西把我们和别的国民隔离开来，所以不管你锁住了门，学问还是一声不响地侵进我国来。学问这东西，真是大胆的，他并不顾虑你监察局的决议与禁止，还是散布出他的光明。所以，好朋友

呵、你想迫胁他、拿了用旧了的木塞想来阻止他的潮流，你是决不会成功的呵！”

中国人是——非宗教的国民，他与别国人的相差只在所信奉的是护符而非神，是宗教以前的魔术，至于宗教的狂热则未必更少。他能比俄国好么？我即使十分爱国也万不敢说。爱和平，宽容，这都是自己称赞的话，我却不敢附和。我觉得中国人的大病在于喜欢服从于压制，最缺乏的是对于一切专制之憎恶。俄国有密哈耳局长，也有亚力舍托尔斯泰，中国则满街都是密哈耳局长（而没有那一点的知识），所以我对于俄国禁止事件不敢怎么批评，还是我们自己趁还可以说一两句的时候好好地利用这个机会吧。

（「托尔斯泰的事情」、[民国]十四年二月五日）

【大まかな内容】ダーウィンの『種の起原』がロシア語に翻訳された際、検察官はその出版の差し押さえをした。それを知ったトルストイは、一通の書簡を検察官に送った。貴下の後ろには別に尻尾が生えているわけでもなく、もし大洪水前の時代に知らなかったことがあったとすれば、どうしてそんなに慌てているのか。もしも理性の声に耳を傾けるならば、すべての学問はいかなる禁制にも甘んじられず、完全な自由のもとで繁栄にならなければならないのだ。貴下には出版禁止を宣言する権利がどこにあるのか。創世記の時、貴下はその場に居合わせたのか。どうして人類は徐々の変化で現在のような状態になれなかったのか。良き友よ、あなたに告げるべきもう一つの言葉がある。すなわち、われわれロシア人には、自国民とほかの国民とを隔離させるような万里の長城を持っていないのである。たとえ門を閉ざすにしても、学問はこっそりと我が国に入ってくる。学問というものは、非常に大胆で、検察当局の決議や禁止をいさいかまわず、輝かしく光る力を持っている。

中国人は非宗教の国民である。他の国民との違いはというと、中国人が信じるのはお守りであり、神ではない。しかも宗教以前の魔術である。ただし宗教に対する熱狂さは少なからずあるだろう。中国人はロシア人より良いかということ、たとえ私は国を愛しているにしても、そうだとも言えない。平和とか寛容とか言っている

が、これらは自画自賛に過ぎない。中国人の病いは、服従や圧制を好んでおり、最も欠けているのが専制に対する憎悪であると思う。ロシアにはミハイル局長もあれば、トルストイもある。中国はといえば、至る所にミハイル局長のようなもの（これっぽっちの知識も備えていない）があるだけである。

先にフォースターに触れたが、世紀の変わり目にフォースターと周作人との共通点があったと思われる。フォースター（1879-1970）の作品は、世俗的なヒューマニストの視点が多いが、キリスト教を失ったエドワード朝時代の文学にパンの復活が広く見られ、この一種の汎神論あるいは神秘主義思想がこの期の文学の特徴である。エドワード朝の知識人たちが危惧していたのは、平和な生活の中でイギリス人が墮落していくことであった。そこで、エドワード朝の作家たちは、宗教的な世界と現世的な世界の境界を打破し、宗教と科学を結びつけて新たな世界観を樹立しようとしていたのである。ケンブリッジでギリシア文化を学んだフォースターは、キリスト教に代わるものとして、ギリシア文化に見られる自然崇拜という直観的・幻想的な思想に、現実の問題を解く鍵を求めた。彼はヘブライの伝統に代わって、ヘレニズムに文学の道を求めたのである。

一方、周作人の場合、反キリスト教ほどの精神的社会的遺産がないものの、理想主義が台頭する時代のなかで、彼は一時的に「新しき村」の理想に共感を寄せていた。「五四」運動のなかで周作人は、新文化の担い手として儒教的道德倫理に対し批判的、懐疑的な目を向けていた。それ以降の文学低迷のなかで、周作人は文学と卑俗な人生との接点を求め、古代ギリシア文学および浮世の快楽主義を基調とする江戸文芸に文学の道を求めていくわけである。

伝統なる小品文は、文人の趣味や閑情を吐露する最高の境地であるが、周作人にとって小品文は、単なる趣味や抒情を言い表すものではない。上記の文からも見るように、周作人の「美」意識は、鋭く現実社会に矛先を向けている。そこには、卑俗な人生に永遠の真理を探究する彼の姿勢が写し出されている。周作人の批判精神は衰えるどころ

か、その風刺の眼差しは益々鋭くなったという感がある。従って、「新しき村」の理想郷から脱皮したからといって、まったくユートピアの精神を捨てたとは断言できない。

冒頭に触れた周作人の「保定定県の旅」(1934)という文章を見るかぎり、周作人におけるユートピアの精神が消えるどころか、鋭く社会を観察する眼差しは相変わらず健全である。周作人の社会思想の傾向は、むしろ「新しき村」の理想郷から自然への理解、科学的世界観の重視に現れている。例えば、「紀念徐光啓」(1952)などの文章にも周作人の社会思想が貫かれている。従って、「新しき村」の理想をめぐる周作人の思想上や文芸上の転回は、必ずしも一時的な心情によるものではなく、周作人の社会思想と深く関わっていると思われる。

周作人の啓蒙思想は、更に反宗教的傾向に対しても現れている。一九二二年三月、北京『晨報』には、世界基督教学生同盟が四月一日に清華大学で大会を開くという記事が掲載されたが、これに対して北京の学生らは「非基督教学生同盟」と組織し対抗し、反対宣言も発表した。その宣言の中で、キリスト教は「経済侵略の先鋒隊」だと、過激的な言葉で攻撃した。その後、学生数人は当局に逮捕された。これに続き北京の学界でも、「非宗教大同盟」が発足し、蔡元培、陳独秀、李大釗らも参加した。同年三月三十一日、『晨報』に周作人、钱玄同、沈兼士、沈士远、马裕藻らの諸氏による署名の「信教自由の宣言」が発表された。この騒動をめぐる、周作人グループと陳独秀グループとの間に大弁論が行われた。周作人は言論自由という立場から、思想の自由と信教の自由を訴えたが、陳独秀らは、学生逮捕をめぐる弱者の立場から「非基督教学生同盟」を支持した。両者の間に論争は噛み合わず、論点のずれが生じた。その背景には集会自由や言論統制をめぐる国家権力が絡んでいたことも窺える。

## 結びに代えて

以上、研究調査報告の外に、周作人の『芸術と生活・自序』における文芸上のマニフェストに着目して、二十世紀初頭の周作人におけるユートピ

アの精神について考察した。周作人は明治新文学や「新しき村」の理想主義に接することによって、一九一〇年代半ばに「人の文学」などの評論で人間主義の文学を主張したが、「五四」運動以降の文学低迷の中で理想主義から脱皮して文学芸術と卑俗な人生との接点に関心を持つようになった。その後、古代ギリシア文学および日本古典文学（特に近世の俗文学）に道を求めていったのである。彼の終生のテーマは、この二つの文学系譜のなかで費やされていたとも言えよう。周作人は中国文化史において、ヘレニズム精神を受け継ぐ継承者の一人にほかならない。

周作人の外来思想の受け入れをめぐる、拙文「周作人の思想と文学の方法をめぐる（その一）」（『浅析周作人的思想与文学方法（一）』、『紹興鲁迅研究2009』、紹興鲁迅記念館編、2009. 9）の中で、二十年代における周作人のユートピアの精神とワイマール時代の文化運動との関連に着目し、周作人の思考様式および小品文における真理の探求方法と、ヘレニズムの精神を継承したハイデッガーの文芸思想およびブロッホの思想とについて言及している。周作人の小品文における究理の方法は、ある意味ではハイデッガー、ブロッホの思考様式にも相通ずるところがある。無論、現代隨筆を考える上で、周作人は戸川秋骨、永井荷風や谷崎潤一郎等に少なからぬ影響を受けているが、これらの影響関係も視野に入れて考察するつもりである。

なお、昨年の暮れに文潔若女史より「丸山昇・蕭乾・文潔若往復書簡(1988-2005)」の整理が依頼された。書簡内容は多岐にわたり、特に香港時代における蕭乾と郭沫若との論争および一九四九年以降の中国文壇の出来事について、今までに知られていなかった新たな事実が触れられている。これらの書簡は、中国現代文学を語る上で重要な資料となっている。本研究の一環として今後「資料編」、「研究篇」として日本で公表したいと考えている。

\*本研究は、日本学術振興会科研費補助金（基盤研究C、課題番号20520172 [研究代表者]、平成20年度、21年度、22年度）による研究課題「近代中国の口語散文に与えた日本文学の影響—周作人の日本文学受容をめぐって—」の一部である。

#### 【参考文献】

- 『周作人散文全集』、広西師範大学出版社  
『周作人研究資料（上下）』、天津人民出版社  
『周作人伝』、銭理群著、北京十月文芸出版社  
『翻訳家周作人』、王友貴著、四川人民出版社  
『フォースター著作集』、みすず書房  
『フォースター評論集』、岩波文庫  
『E.M.フォースターの姿勢』、小野寺健著、みすず書房  
『倒錯とユートピア』、ジョエル・ホワイトブック著、桑子敏雄・鈴木美佐子訳、青土社  
『ユートピアの文学世界』、慶應義塾大学出版会